

Career Cruising

キャリア・クルージング

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探するため、
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

好きなことを極め、
揺るぎない自信を手に入れた

内藤大助氏 Naito Daisuke

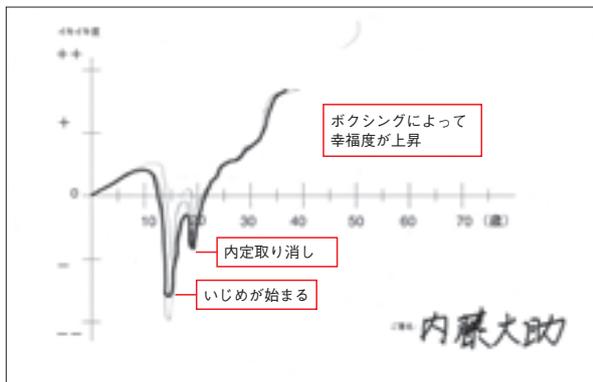
元プロボクサー

Career History

内藤大助氏の
キャリアヒストリー

1974年	0歳	北海道虻田郡生まれ。出生前に両親が離婚
1987年	13歳	中学入学。学校ではいじめの標的になり苦しんだ
1992年	18歳	北海道豊浦高等学校卒業。上京し、兄が勤務していた木工所でアルバイトを始める。ボクシングに興味を持ち、19歳で宮田ボクシングジムに入門。22歳でプロデビュー
1998年	24歳	全日本フライ級新人王決定戦で王座獲得
2001年	26歳	日本王座に挑戦するが、引き分けで獲得ならず。翌年にはWBC世界フライ級王者・ボンサクレック選手に挑戦するが、KO負けを喫する
2004年	29歳	日本王座獲得。同年の防衛戦では日本タイトルマッチ史上最短(当時)の1ラウンド24秒でKO勝ち。翌年には世界王者・ボンサクレック選手に再挑戦するが、負傷判定*で破れる
2007年	32歳	WBC世界フライ級王座3度目の挑戦で、ボンサクレック選手に判定勝ち。世界王座獲得。
2009年	34歳	6度目の世界王座防衛戦で亀田興毅選手に判定負けし、王座陥落。翌年5月の再起戦でKO勝ちするも、その後は試合を行わなかった
2011年	37歳	現役引退を表明。引退後は解説者やタレントとして活躍している

*負傷で試合が進行できない場合に、規定のラウンドまで達していれば、そのラウンドまでのポイントで勝負を決める。



直筆の人生グラフ。いじめの標的にされていた中学時代が最も深い谷底。ボクサー時代は、試合に勝つごとに人生の充実度が増している。

元WBC世界フライ級王者の内藤大助氏。現役時代の戦績は42戦36勝3敗3分。KO率も高く、王者の名にふさわしい成績を残した。強面なボクサーとは異なる、柔和なキャラクターが注目を集め、引退後もボクシングの試合解説者やタレントとして活躍している。

「いじめられっ子」の過去を
断ち切りたくてボクシングを始めた

中学時代は同級生にいじめられ、苦しんだ。暴力も受けたが、仲間はずれや言葉による嫌がらせなど精神的ないじめがこたえたという。

「悔しかった。中2のクラス替えを機にいじめが始まって、『ボンビー(貧乏)』と呼ばれ、ストレスで胃潰瘍になってね。下痢もひどく、毎日3回薬を飲んでた。でも、みんな見て見ぬふりでした。1人だけいじめの首謀者に注意してくれた先生がいて、一時はおさまったけど。その後、またやられた。僕は体が小さく、口も立つほうじゃなかったから、どうしようもなかったんです」

高校進学後は新たな友人と出会い、元来の明るさを取り戻したが、いじめのトラウマには長い間悩まされた。「内定していた就職を、先輩とのつまらない口論でファイにして、ますます自分に自信をなくしてね。自分も人も信じられなくて、ひねくれてしまっていました」

そんな姿を見かねた母から「修行してこい」と家を追い出され、上京。兄が勤務する木工所でアルバイトとして働いていたある日、雑誌を見て興味を持ち、ボクシングジムに通い始めた。これが大きな転機となった。

「はじめはただ、腕力をつけたいと思ったんです。強くなって、自分をいじめた奴らを見返してやりたいって。でも、一生懸命練習する仲間に出会って、リングに上がる先輩がかっこよく見えるようになった。気がついたら、自分もプロボクサーを目指していました」

「自分にはどうせ無理だ」という気持ちもあったが、あるジム仲間の言葉をきっかけに変わったという。

「彼はいつも僕の愚痴を黙って聞いてくれたんだけど、あるとき『大ちゃんをあきらめてばかりだね。俺なんて、頑張れば何でもうまくいって思ってるもん』とのんびりした調子で言われてね。能天気だなとあきれたけど、その言葉がじわりと効いてきて。頑張ればうまくいくなんで夢物語みたいだけど、現実になったら面白い。やるだけやってみようかなと思うようになったんです」

初の世界王座挑戦で史上最速KO負け。 「日本の恥」と言われ、屈辱を味わった

トレーニングに打ち込むようになって、もともと運動神経に恵まれていた内藤氏はめきめきと腕を上げた。22歳でプロデビューし、24歳で全日本フライ級新人王を獲得。同時期に結婚して気力も充実し、順調に試合を勝ち進んでランクを上げていった。

「地元の後援会もできて、みんなから持ち上げられるようになってね。それまでは純粋にボクシングが好きでやっていたのに、有名になりたい、モテたい、金ほしいって欲が先に立って、完全に舞いあがっちゃった（笑）」

ところが、26歳で挑戦した日本タイトルは引き分け。

翌年には世界王座を狙ってタイのボンサクレック・ウォンジョンカム選手に挑戦したが、世界タイトル史上最短の1ラウンド34秒でKO負け。インターネットには「日本の恥」と書かれ、辛酸をなめた。

「負けて離れていく人たちも多く、傷つきました。でも、変わらず応援してくれる人たちもいた。うれしくてね。この人たちを喜ばせるためにもう一度頑張ろうと、29歳で念願の日本王座をとりました」

勝利後のインタビューでは、次の試合について聞かれても、泣きながら「もういいです」と繰り返した。

「当時は日中バイトして、夜はジムに通う日々。生活が苦しくて家族に迷惑をかけていたので、日本王座をとって、みなさんに恩返しできたらやめようって決めていたんです。でも、いざ目標を達成したら欲が出て。世界王座再挑戦をかけてトレーニングに励みました」

だが、2度目の世界王座挑戦も負傷判定でボンサクレック選手に完敗。負けたらやめるつもりだったが、決心がつかず、最終的には現役続行の道を選んだ。

「もともとは『いじめられっ子』を抜け出すためにボクシングを始め、肉体だけでなく精神も強くなって、『俺はもう二度といじめられない』と自信を持てるようになった。だから、もう十分のはずなのに、どうしてもやめられなかった。減量して、殴り合って、あんなにつらいのに、不思議だよ。楽しかったんだよね、仲間がいて」

応援してくれる人の存在に励まされ、 3度目の挑戦で世界王座を獲得

世界王者の座をかけて、三度^{みたび}ボンサクレック選手に挑む機会が巡ってきたのは2007年。32歳のときだ。資金集めが難航し、試合開催が危ぶまれたが、直前の会見で内藤氏自身が支援を呼びかけたところ、スポンサーが決定。一般からも寄付が集まった。

「縁もゆかりもない僕を応援してくれる人がこんなにいるなんて、うれし過ぎて、世の中狂ってると思いました。みんなの気持ちに応えるには、自分も狂ったように頑張るしかない。3キロメートルダッシュなど常識では考えられないトレーニングを重ねて試合に臨みました」

その結果、手にしたチャンピオンベルトは重かった。3カ月後に行われた初防衛戦では、亀田大毅選手を相手に3対0の判定で勝利。亀田選手の反則行為にも冷静に対応し、世間の注目を集めた。その後2009年8月までに5度の世界王座防衛に成功したが、6度目の防衛戦で亀田興毅選手に敗れ、王座から陥落。現役を続行したものの目標を見失い、2011年11月に引退を表明した。

「日に日に闘争心のなくなっていく自分を感じていました。肉体的にはまだ大丈夫でしたが、リングに上がり続けるのはお客さんに失礼だと思って引退を決めました」

引退後の生活には不安もあった。

「ボクシングひと筋だった自分に何ができるんだろうってね。でも、『引退後の活動を全力で応援します』と言ってくれた所属事務所の言葉を信じて、今は試合解説やバラエティ番組への出演など、いただいた仕事を一生懸命やるしかないと考えています」

現在はテレビで活動する一方、いじめをなくしたいという思いから、全国での講演活動にも力を入れる。

「僕がいじめを乗り越えられたのは、世界チャンピオンになれたからじゃない。好きなことを極め、揺るぎない自信を持てるようになったからです。いじめからは必ず抜け出せます。僕の体験を話すことで、今、いじめられている人たちが勇気を持ってくれたらうれしいですね」



マイナス思考からプラス思考へ 脱・いじめでやっと獲得した「心の強さ」

大久保幸夫 リクルートワークス研究所 所長

「いじめがあったから世界チャンピオンになれたと言われるのがいちばん嫌だし、絶対にそんなことはないよ」と内藤氏は力を込めて語る。「ボクシングを始めたのは確かにいじめがきっかけだったけど、世界チャンピオンになったのは自分が努力したから。いじめは関係ない。いじめなんて何一ついいことはないんだよ」と。そして、「ちゃんと否定しておかないと、いじめを肯定することになっちゃうんでね」と補足した。

子どもの頃に受けたいじめは、多くの場合、生涯にわたって心に傷を残す。中学時代のことであっても、成人した後まで、自己否定や他者に対する不信感となってたびたび顔を出すのだ。「どうせ俺なんて……」。これが若い頃の彼の口癖だったという。完全な自己否定の言葉だ。しかし、彼はいじめを克服することができた。

その1つの理由は、東京に出てきて、昔からの人間関係から一旦解放されたことではないだろうか。誰も知らない街で一から再スタートしたことは、結果的に大きかったのだ。

そしてもう1つの理由は、ボクシングという、大好きで才能があるものに出会えたこと。強くなるにつれて、自分も捨てたもんじゃなれないようになるようになったに違いない。

そのタイミングでジム仲間から言われた、「マイナス思考だな」という言葉が、彼に変化するきっかけを与えたのだ。

今でも100%傷が癒えたわけではないが、「これからは仮にこの拳がなかったとしても、いじめられることはないよ。心の強さがあるからね

(笑)」という。成績の上がないときでも応援してくれる真のファンの存在や、世界チャンピオンまで勝ち上がった事実があったからこそ、得られた強さだろう。

タイでチャンピオンに挑戦したときに史上最短時間で負けて、「日本の恥」とまで言われたのに、後に彼は、トランク스에自ら「最短男」と記してキャッチフレーズにしていた。もちろん日本王座防衛戦で、1ラウンド24秒KOという最短勝ちもしたからだが、心が強くなければできないことだ。自分の弱い部分を許せるようになった、ということだろうか。心の強さは偶然の産物ではない。努力して勝ち取るものだということを彼は教えてくれている気がする。

中学校でのいじめの実態

いじめを認知している学校の割合 **52.9%**

いじめの態様（認知している学校のうち。複数回答）

冷やかしゃからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる。	67.1%
仲間はずれ、集団による無視をされる。	18.0%
軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする。	20.0%
ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする。	7.3%
金品をたかられる。	2.5%
金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする。	7.9%
嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする。	7.0%
パソコンや携帯電話などで、誹謗中傷や嫌なことをされる。	5.6%

出所：文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（平成23年度）